

近畿地方整備局 紀伊山地砂防事務所
記者発表

配布日時	平成26年8月12日 10時00分
------	----------------------

件名	・平成26年台風11号による赤谷地区及び栗平地区の河道閉塞部の一部侵食の発生について
----	--

概要	<ul style="list-style-type: none"> <li>・平成23年台風12号により発生した河道閉塞箇所の対策工事を鋭意進めてきたところです。</li> <li>・8月8日からの台風11号による降雨により、赤谷地区及び栗平地区の河道閉塞部において、湛水池からの水が仮排水路へ流出しました。</li> <li>・この流水により、閉塞土砂の一部が侵食され、下流に土砂が流出しました。</li> <li>・但し、堆積土砂の勾配が緩やかになったことから、直ちに下流部に被害が及ぶ危険性は小さいと考えております。</li> <li>・今後、土砂の急激な侵食が進行する可能性があることから、河道閉塞部の保護に至急着手するとともに、侵食を受けた部分の対策を検討してまいります。</li> <li>・なお、上記の状況から、現場への進入が困難な状況のため、22日（金）に予定している報道関係者向けの現場見学会については、行程を変更して実施致します。（変更後の行程については、申込者に別途ご連絡いたします。）</li> </ul>
----	--

取扱い	—
-----	---

配布場所	近畿建設記者クラブ 大手前記者クラブ 奈良県政・経済記者クラブ 五條市政記者クラブ
------	--

問合せ先	国土交通省 近畿地方整備局 紀伊山地砂防事務所 副所長（技術） 林 和彦 工務課長 酒井 良 TEL 0747-25-3111 FAX 0747-25-3276
------	---

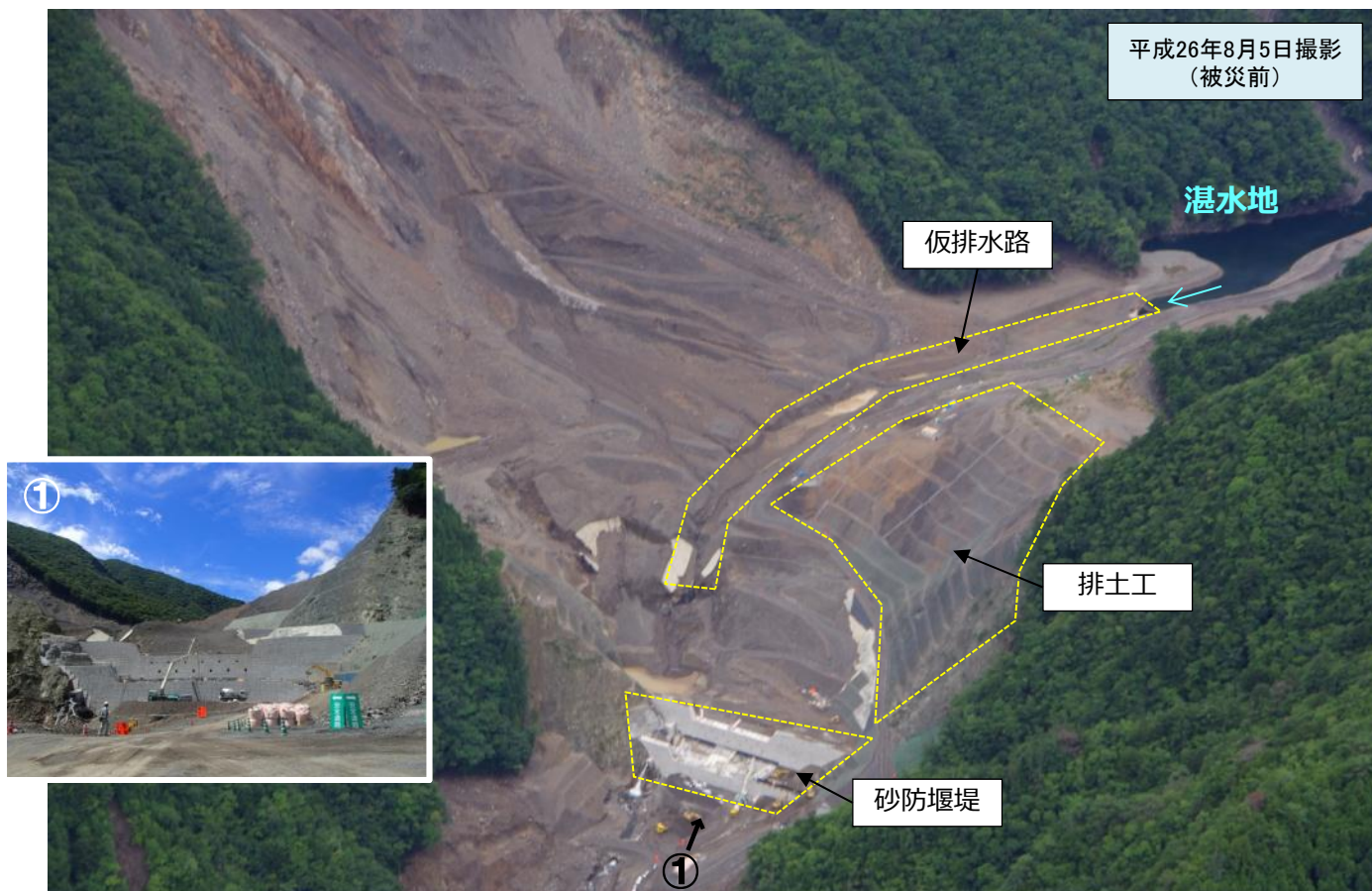
## 赤谷地区

## 位置図



## 赤谷地区

## 施工状況図





## 赤谷地区

H23台風12号による被災直後  
(平成23年10月3日撮影)

河道閉塞による天然ダム  
の形成



H26台風11号前のようす  
(平成26年8月5日撮影)



H26台風11号後の被災状況  
(平成26年8月11日撮影)

- ・ 累積降雨量 約330mm  
(8月8日 19:00～  
8月10日 8:00)
- ・ 最大時間雨量 31mm/h  
(8月10日 8時)





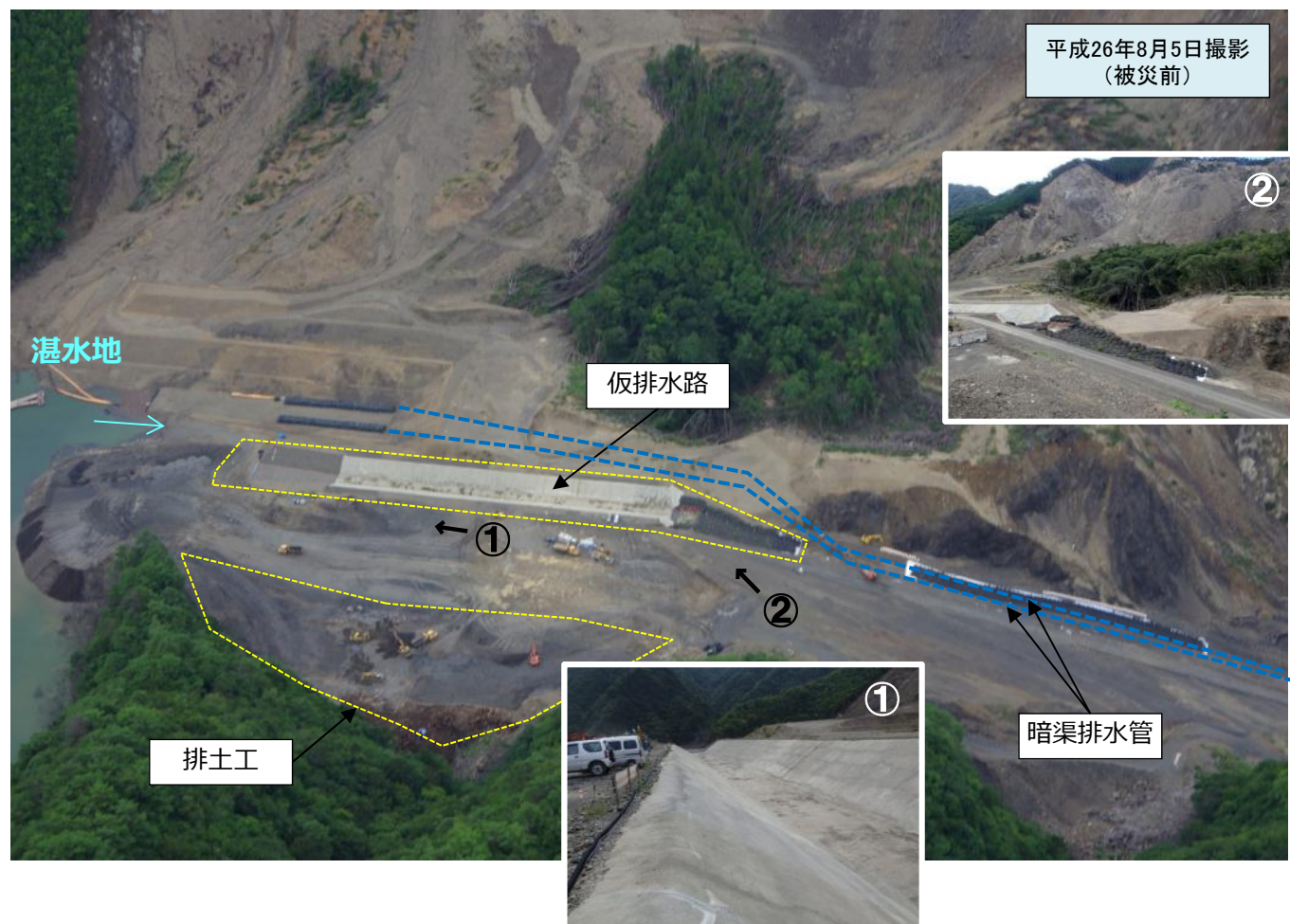
栗平地区

位置図



栗平地区

施工状況図





## 栗平地区

H23台風12号による被災直後  
(平成23年9月6日撮影)

河道閉塞による天然ダム  
の形成



H26台風11号前のようす  
(平成26年8月5日撮影)



H26台風11号後の被災状況  
(平成26年8月11日撮影)

- ・ 累積降雨量 約475mm  
(8月9日 0:00～  
8月10日 6:00)
- ・ 最大時間雨量 30mm/h  
(8月9日 12時)



## 台風 11 号に伴う赤谷及び栗平河道閉塞被災状況 所見

### 【赤谷地区】

#### ○今回の被災メカニズム

- ・ H23.9 崩壊時の崩壊残土（左岸不安定土砂）の崩落と、仮排水路の流失及び縦侵食の拡大を確認。
- ・ 天然ダム形成後の最大となる降雨（330mm）により、不安定土砂の崩落とある程度の縦侵食が生じたと推察される。
- ・ ただし、平成 26 年 7 月末時点で本堤部が完成していた基幹堰堤が効果を発揮し、縦侵食の進行を軽減したものと考えられる。
- ・ なお、平成 23 年 9 月の深層崩壊斜面においては、新たな拡大崩壊やガリー侵食、目立った湧水は確認されなかった。

#### ○下流域への被害の危険性について

- ・ 直ちに下流部に被害が及ぶ危険性は小さいと考えられる。  
理由 ①平成 23 年 9 月の深層崩壊斜面に新たな拡大崩壊は認められない  
②基幹堰堤により、今後大幅な侵食が進む危険性は少ない  
ただし、台風の接近等の大雨が予想される場合は、十分な警戒が必要である。

#### ○今後の対策について

- ・ 水位の観測、CCTV による状況監視は警戒・避難体制上重要となることから、早期の復旧を行うとともに、地元自治体や住民と監視体制について十分情報共有を図ることが重要。
- ・ 基幹堰堤の効果は大きいと考えられることから、速やかな復旧及び残工事の完成を見込む必要がある。

### 【栗平地区】

#### ○今回の被災メカニズム

- ・ 仮排水路及び暗渠管の流失、縦横侵食の発生を確認。
- ・ 仮排水路を流下した流水により河道閉塞部の末端から侵食が進み、上流端に到達した段階で急速に縦横侵食が進んだと推察される。
- ・ なお、崩壊斜面については、空中からの調査においても、新たな拡大崩壊やガリー侵食、目立った湧水は確認されなかった。

#### ○下流域への被害の危険性について

- ・ 直ちに下流部に被害が及ぶ危険性は小さい。  
理由 縦侵食が進んだことによって、流路の勾配が侵食前に比べ小さくなった  
ただし、台風の接近等の大雨が予想される場合は、十分な警戒が必要。

○今後の対策について

- ・ 水位の観測、CCTV による状況監視は警戒・避難体制上重要となることから、早期の復旧を行うとともに、地元自治体や住民と監視体制について十分情報共有を図ることが重要。
- ・ 速やかな基幹堰堤工事への着手が必要。
- ・ 流木の発生源や、河道閉塞部の直下流部へ堆積した土砂の再移動について、監視が必要。
- ・ 暗渠管による排水等の対策工の効果によって、河道閉塞土砂の侵食量及び湛水池からの流出量が低減されたものと考えられるが、詳細については今後検証が必要。

\* なお、今回の所見は、ヘリコプターからの目視に基づく調査の結果であり、被災メカニズムに関しては、今後の詳細な調査の進展により、内容に変更が生じる可能性がある。

国土技術政策総合研究所土砂災害研究室長    國友   優  
土木研究所土砂管理研究グループ主任研究員   木下   篤彦